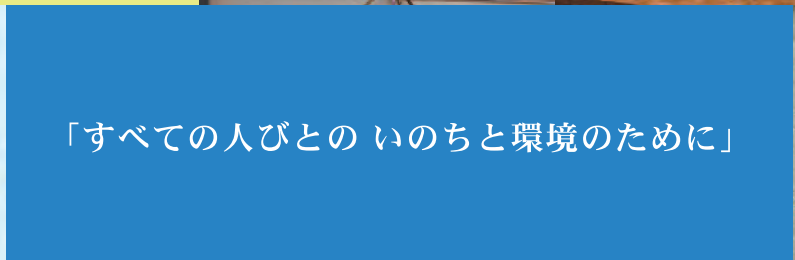


公益事業レポート 2021

遠山椿吉記念 第7回 健康予防医療賞 授賞



すべての人びとのいのちと環境のために

当財団は、2013（平成25）年4月1日に一般財団法人東京顕微鏡院に移行しました。これまで財団法人東京顕微鏡院（旧財団）が行ってきた諸事業を引き継ぐとともに公益目的支出計画に則って公益事業を実施し、これにより「健康な命」と、それを支える「生活環境衛生」の維持・向上・増進を目指し、もって社会福祉に貢献することを目的としています。

新制度下において、一般財団法人に移行した法人は、これまで法人内部に留保した財産（公益目的財産）を、自ら定めた公益目的支出計画に基づき、本来の目的である公益目的に毎年一定額を使用することが義務付けられています。

令和3年度を迎えて

2021（令和3）年度は、創立130周年を迎えた記念の年となりました。新型コロナウイルス流行の中、当財団はECサイトの立ち上げやPCR検査所の開設など、時代のニーズに合った新たな事業を展開、こころとからだの元氣プラザも飯田橋から神保町に移転後、新たな施設でより充実したサービスを提供し、公益目的事業費としては、

37,951千円を支出する計画でとり進め、結果、本年度は35,734千円の実施となりました。

14年目を迎えた遠山椿吉賞

2021（令和3）年度の遠山椿吉賞は、健康予防医療賞としては7回目となり、多くの研究者から選出されました。

本賞は、大規模高齢者追跡コホート研究の実施を通じて、フレイル発症の危険度を示すエビデンスを創出、発信するとともに、新たな早期発見・予防プログラムを創出した研究に対し、顕彰を行いました。多くの自治体や医療現場で活用されており、公衆衛生と予防医療の実践という遠山椿吉賞のコンセプトに合致した点が高く評価されました。

遠山椿吉賞は、選考委員の先生方の本賞の主旨に対する真摯な思いと厳正なる審査により、公衆衛生と予防医療にまい進する研究者に光をあてる顕彰制度として、わが国に根付きつつあることを感じております。改めて当財団の創立者、遠山椿吉博士に心からの感謝を捧げたいと思います。

健やかなところとからだのために

2020年度は時代の要請を捉え、先駆的視点から、認知症をテーマとしたセミナーシリーズを企画いたしました。2021年度は、現在も社会に甚大な影響を及ぼし続けている新型コロナウイルスの現状や今後の対策について取り上げたシンポジウムを企画。感染状況に鑑み、リモートで収録し、後日オンデマンド配信を行いました。

当財団豊海研究所にて、職員が講師を務める「夏休みこども研究者体験セミナー」も中止し、代替として動画「気をつけよう食中毒！」を制作・配信しました。

創立130周年、決意を新たに

130年前、創立者の遠山椿吉博士は、人びとの健康な命を脅かしていた結核や脚気の治療や研究に取り組むなど、人びとのために尽力しました。新型コロナウイルス流行の影響が続く中、公衆衛生・予防医療において社会に貢献し続けることが、現在の私たちの役割であり、創立者の信念を

受け継ぐことに繋がるのだと改めて強く意識し、決意を新たに臨みたいと思います。

「健全な生活環境」を追求する東京顕微鏡院と、「健康なところ」「健康なからだ」を追求するところとからだの元氣プラザは、これからも人びとへ寄り添い貢献する事業に取り組んでまいります。

2022（令和4）年6月

一般財団法人東京顕微鏡院
医療法人社団ところとからだの元氣プラザ



理事長

山田 匡通

学術振興 (遠山椿吉賞)

すべての人びとのいのちと環境のために

2008(平成20)年度、当財団創業者、医学博士遠山椿吉の生誕150年、没後80年を記念して創設した、公衆衛生と予防医療の分野における研究者を対象とした顕彰制度です。「遠山椿吉記念 食と環境の科学賞」と「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」を設け、隔年で選考顕彰します。2015(平成27)年度から、若い研究者を支援する「山田和江賞」も、新たに加わりました。2021(令和3)年度は、新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、リモートでの授賞式を執り行いました。



遠山椿吉記念 第7回 健康予防医療賞

2021(令和3)年度は、将来の予防医療のテーマに先見的に着手したものを重点課題としました。平成27年度から設けられた「山田和江賞」は、40歳以下(応募年の4月1日現在)の応募者に対し、その優秀な研究成果を顕彰するとともに、研究のさらなる発展を奨励する目的で、毎年1名に賞状、記念品および賞金100万円を贈呈し、顕彰するものです。故山田和江名誉理事長・医師の、50余年にわたるご貢献を記念して創設されました。

本賞は、地道に社会への貢献を追求する研究者を顕彰する賞と位置づけています。

遠山椿吉記念 第7回 健康予防医療賞



飯島 勝矢 (いじま かつや) 氏

東京大学高齢社会総合研究機構 機構長・
未来ビジョン研究センター 教授

「フレイル予防を軸とした新しい
介護予防実現のための官民協働システム構築」

副賞 300万円

遠山椿吉記念 第7回 健康予防医療賞 山田和江賞

該当者なし

選考の過程

2021(令和3)年3月から学会等540団体およびマスメディア77媒体に資料を送付し、日本全国の大学関連学部学科2,777ヶ所、主な研究機関等49ヶ所に応募案内を送り、6月末日には29件のご応募をいただきました。

選考プロセスは、一次審査・選考委員会という二つのステップで進めました。一次審査では、各選考委員に29件すべての応募論文に目を通していただき、五つの評価軸(①公衆衛生への貢献度、②公衆衛生向上を図る創造性、③予防医療の実践、④これからの人材育成、⑤推薦したいテーマと思うか)で五段階評価を付けていただきました。評価票の集計資料は各委員に事前に読んでいただき、選考委員会では本賞の趣旨と今年度の重点課題を確認し、十分に討議を重ねて受賞候補者の選出に至りました。

この選考委員会の結論は、当法人・医療法人合同の経営会議にて選考委員長よりご報告いただき、授賞者が決定しました。

- 3月「遠山椿吉記念 第7回 健康予防医療賞」広報ホームページ掲載
- 4月 公募開始
- 29件 応募
- 6月末日 締め切り
(7月～9月 選考プロセス)
- 遠山椿吉賞 選考
本賞・山田和江賞
推薦
- 9月 選考委員会
- 10月 経営会議で決定
- 2月 授賞式(リモート)



創業者 遠山 椿吉 (とおやま ちんきち)

1857(安政4)年、山形県生まれ。東京大学医学部において別課医学を修めた後、山形県医学校長心得などを歴任。1888(明治21)年、東京医科大学撰科に入学し、衛生学および細菌学を研究。1890(明治23)年1月、帝国医科大学国家医学科に入学、同年4月卒業証書を授与される。1891(明治24)年、東京顕微鏡院の前身である東京顕微鏡検査所を創立。かたわら東京慈恵医院医学校(東京慈恵会医科大学の前身)講師、東京市衛生試験所長などの職を兼ねる。特筆すべき業績は、東京顕微鏡学会の創立、ペスト菌の研究、脚気の治療方法の研究、東京の水質管理を担い、水道の衛生管理に尽力。また保健部を新設し、予防医療を展開するなど多岐にわたる。機関紙「顕微鏡」「東京顕微鏡学会雑誌」を主宰し、医事衛生に関する数多くの著書や短歌を残し、華道、庭園学などについても著述している。亡くなる1年前にそれまでの人生を振り返り、思想哲学をまとめ「人生の意義と道徳の淵源」を上梓した。1927(昭和2)年、東京顕微鏡院を財団法人とし、初代院長に就任。1928(昭和3)年10月1日逝去。享年71。

授賞にあたって



山田 匡通

一般財団法人東京顕微鏡院
医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 理事長

この度『遠山椿吉記念 第7回 健康予防医療賞』を受賞された飯島勝矢先生は、大規模高齢者追跡コホート研究の実施を通じて、フレイル発症の危険度を示すエビデンスを創出するだけでなく、多くの自治体に導入され、実際に現場で活用されており、公衆衛生と予防医療の実践という遠山椿吉賞のコンセプトに合致した点が高く評価されました。受賞を心よりお祝い申し上げます。

遠山椿吉賞は、『公衆衛生向上をはかる創造性』、『予防医療の実践』、『これからの人の育成』を本質とした賞と位置づけており、わが国の公衆衛生、予防医療分野のますますの発展につながれば幸いです。

また、選考委員の皆様の多大なるご尽力に、心から厚く御礼を申し上げます。飯島勝矢先生のますますのご活躍とご健勝を祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。誠にありがとうございます。

受賞者あいさつ

遠山椿吉賞 飯島 勝矢氏

この度は、遠山椿吉賞（第7回健康予防医療賞）を賜り、誠にありがとうございます。
光栄の至りに存じます。

私は、もともと循環器内科医としての臨床経験を積み、その後、老年医学へ大きく踏み出す決意をいたしました。その流れで世話になった教室（東京大学医学系研究科加齢医学講座）では、幅広くかつ柔軟に対応を行う高齢者医療における臨床を学び、さらに多様な研究を通して洞察力を磨いたり、若手人材の教育を行うなど、様々な経験をさせていただきました。自分自身の医師人生をステージに分けてみると、循環器内科医として心臓カテーテル治療を主に行っていたのが第1ステージ、老年医学を通して臨床・研究・教育を推し進めたのが第2ステージであったのだろうと振り返ります。

その後、ご縁があり、東京大学内に新設された分野横断型の「高齢社会総合研究機構（ジェロントロジー：総合老年学）」に学内異動し、少子高齢化の進む日本全体および各地域コミュニティに存在する多岐にわたる課題に触れ合うことができました。まさに第3ステージに入ることができたのです。

高齢者も含めて地域住民は多層的に存在しておりますが、生きがいおよびやりがいを持ちながら、日々の生活を送ることができているのか、地域貢献も含めた住民主体活動を今まで以上に推進できる地域の安定基盤を構築できるのか、少しでも長く自立期間を延ばし、個人および地域の両面から真の健康長寿社会を実現できるのか、たとえ多病により心身機能が弱っても、住み慣れた自分の地域と家で住み続けられる社会保障制度や、地域でのセーフティーネットの在り方とは、さらには前述の全てを具現化し持続的なまちづくりを実現するための産官学民連携の姿とは、以上のような地域課題を頭に描きながら、全国の複数の自治体に参加するフィールドを活用し、課題解決型実証研究（アクションリサーチ）を実践してきました。

なかでも、「フレイル（虚弱）」をいかに早期から予防し、個人における健康長寿実現だけではなく、地域社会での住民主体による健康長寿まちづくりを実現するために、大規模高齢者コホート研究を10年前から行ってきました。そこからのエビデンスを活用し、全国の多くの自治体における高齢住民に対し、新たなスタイルの住民ボランティア（いわゆるフレイルサポーター）が主体的に活躍しながら、自助・互助の考え方のもと、エビデンスベースで作成したフレイルチェック活動の全国基盤を構築しました。また、このフレイル予防戦略は、厚生労働省の新たな政策「高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施」、なかでも通称フレイル健診とも言われている行政施策にも反映されております。これらの取組を包括的に評価していただいたことが今回の受賞につながったと思い、大きな誇りに思います。

今後も、国民一人ひとりの健康長寿実現のため、そして快活な地域コミュニティの再構築のため、多面的な課題解決型実証研究を通して、エビデンスベースでの政策提案および地域実装を推進していく所存でございます。本研究にご協力いただいた諸先輩方および産官学民連携での関連諸氏、そして私の所属で一緒に汗をかいてくださった研究者や事務職の方々に深く感謝申し上げます。受賞の御礼の挨拶に代えさせていただきます。

◆選考委員長講評



門脇 孝氏

国家公務員共済組合連合会 虎ノ門病院 院長、
東京大学名誉教授

「遠山椿吉記念 第7回 健康予防医療賞」の選考についてお話をさせていただきます。本年度は、将来の予防医療のテーマに先見的に着手したものを重点課題といたしました。

本年度はコロナ禍にもかかわらず、29件の応募がありました。前回に劣らず、本年度も優れた研究課題の応募が多かったというのが特徴だと思います。今回は、1) 公衆衛生への貢献度、2) 公衆衛生向上を図る創造性、3) 予防医療の実践、4) これからの人材育成の4つの点から多角的に評価を行い、選考を行いました。

まず若手奨励の山田和江賞ですが、これまでは委員会の強い推薦により候補者を決定してきましたが、今回は強い推薦を得た候補者がいなかったため、今回は「該当者なし」とすることとなりました。

次に遠山椿吉賞ですが、慎重に審議した結果、満場一致で東京大学高齢社会総合研究機構 機構長・未来ビジョン研究センター教授の飯島勝矢先生が選出されました。研究題目は

「フレイル予防を軸とした新しい介護予防実現のための官民協働システム構築」です。

飯島先生は、大規模高齢者追跡コホート研究の実施を通じて、フレイル発症の危険度を示すエビデンスを創出し、発信するとともに、新たな早期発見・予防プログラムを創出されており、研究成果はすでに多くの自治体に導入され、実際に現場で活用されております。特に、飯島先生の研究成果が、人生100年時代を迎えた超高齢社会において公衆衛生の向上を図る創造性に優れていることはもちろん、予防医療の実践を通じ、実際に公衆衛生の向上への貢献が卓越していると認められ、選考委員会は、飯島先生が授賞に最もふさわしい研究者であるとの結論に至りました。

以上、遠山椿吉賞、山田和江賞の選考の経緯をご紹介いたしました。遠山椿吉賞について本年度も素晴らしい研究者を選ぶことができましたのは、選考委員会にとっても大きな喜びです。山田和江賞については、優秀な研究成果を有する若手研究者の一層積極的な応募を期待します。

改めて受賞された飯島先生にお祝いを申し上げ、選考委員長の経過説明といたします。

◆来賓祝辞



辻 哲夫氏

東京大学高齢社会総合研究機構
客員研究員（同機構元教授）

この度の遠山椿吉記念 健康予防医療賞のご受賞、誠にありがとうございます。

厚生労働省退官後東京大学で飯島先生と職場を同じくした私は、これまでの間、寝食を忘れるがごとくの精力的な先生のお仕事ぶりに接してきました。

今後85歳以上の人口が1,000万人に達するという超高齢社会を迎えるにあたり、健康寿命の延伸は、国家的課題です。このような認識を胸に、飯島先生は地域住民のフレイルの実態を総合的な視点に立って克明に調査・解析し、データに根拠をおいたフレイル予防のポピュレーションアプローチの展

望を明らかにされました。

このことは今後のわが国の介護予防政策の一層戦略的な構築の重要な土台になると思います。とりわけ、地域住民への深い思い入れのもとでその互助の力を見事に引き出しつつ、データによるフレイルの見える化やフレイル予防のまちづくりへの展開を図るフレイルチェックという方式を開発され、その普及に注力されていることは、わが国の地域予防活動実践のエポックを画するものであると思っております。

日本の高齢化はこれからが本番です。今回のご受賞を機に、飯島先生が研究・実践の両面で更に大きく羽ばたかれることを心より祈念しております。

東京顕微鏡院創立者 遠山椿吉と脚気の研究

一般財団法人 東京顕微鏡院 食と環境の科学センター学術顧問 伊藤 武



遠山椿吉 博士

実験科学に基づいた研究から、脚気発生の伝染病説を否定

遠山椿吉博士は脚気による悲惨な状況を解決するために、明治30年の後半から脚気の原因究明の研究に没頭し、明治43年に第1回の発表をして以来、大正9年までに研究業績28編を報告しました。その多くの研

究成績は、学会誌『顕微鏡』、『東京医事新誌』などに投稿されましたが、最終的な研究成果は、東京顕微鏡院創立30周年記念出版『遠山博士脚気病原之研究』（大正10年10月発刊）として、一冊の本にまとめられています。



『遠山博士脚気病原之研究』

明治時代の脚気の流行

明治の初期から国内の脚気は患者が増加し、治療が困難で死亡率が高く、予防法がないことから、社会的にも重要な疾患でした。

陸軍軍人の脚気患者数統計では、明治11年頃患者が約9千名、兵員千名当たり200～400%と極めて高いものでした。

海軍は、明治15年に遠洋航海（272日）で乗組員376名中169名が罹患し、うち25名が死亡する大惨事を引き起こしました。治療にあたった海軍軍医の高木兼寛は、白米食の蛋白不足によるものと考え、翌々年の大航海（287日）では白米食を洋食に変更。その結果、脚気患者は25名に留まりました。それ以降、海軍では米麦飯に変更したことで著しく改善し、千名に対する脚気患者率は、明治14年の350%から明治20年以降、0.4%以下に減少したのです。

しかし、明治30年代から大正にかけて、国内の脚気による死亡者数は、毎年約1万から2万명에及ぶことになります。

脚気の病因説

この時代、脚気の原因としては、伝染病説、中毒説、栄養障害説が論じられていました。

東京帝国大学医学部（青山胤通教授）や、伝染病研究所の研究者、あるいは明治41年、政府が設立した臨時脚気病調査会は、伝染病説を熱心に信奉し、脚気菌探しに勢力が注がれていました。脚気患者から球菌や桿菌が検出されてはいたものの、特定な細菌の証明には至っていませんでした。

これに対し、遠山博士は、ニワトリ、ハト、ジュウシマツなどの実験動物による栄養試験を導入して得た成績や、広範な疫学調査の結果から、脚気の本態は、「食物中特殊成分の欠乏」



1.健康なハト

2.発病初期

3.進行し、固有症を呈す

4.末期の瀕死状態

によるものだとし、伝染病説や中毒説あるいは栄養障害説に反対を唱えました。

伝染病説を否定する椿吉

国内の殆どの研究者が伝染病説でしたが、細菌学者である遠山博士は、この考えを勇気を持って否定しました。博士が論じた伝染病説反対の理由は、次のごとくでした。

1. 脚気患者の血液や各臓器からは、特定の微生物や原虫を、最善の技術を駆使しても発見できなかったこと。
2. 白米で飼育し、脚気様症状を呈したハトなどの実験動物の血液や臓器を、健康なハトなどの動物に接種するも、感染を起こして同様の病気を起こすことができなかったこと。

従って、脚気の流行が伝染病に類似することから伝染病説が唱えられているが、疫学的にこれを否定し、米糠の未知の成分の欠乏が脚気の原因である、としたのです。

さらに、①脚気はヒトが密集する都会のみの流行ではないこと、②微生物が増殖する夏季に限らないこと、③衛生環境が悪い河川の周辺に多いが、これは米の栽培が良好で、白米のみを食べることに関係があることを明らかにしました。

また、④米の産地でない欧州や米国でも発生があるが、これは米の輸入により白米を食するためと考えられること、⑤明治時代から脚気が顕著になってきたが、これは精米機の発達により精米技術が高まり、糠を含まない美味しい米が流通するようになったこと、⑥軍隊や刑務所での発生率が高いが、これは白米の喫食が中心で副食物を殆ど摂取しないことが原因である、としました。

伝染病説に固執する「調査会」

遠山博士や都築基之助らなど、一部の学者が、米糠の未知の成分の欠乏が脚気の原因であると主張するも、明治41年に設立された臨時脚気病調査会は、伝染病説を固守し続けました。

しかし、明治45年には、ポーランドの生化学者、カシミール・フンクのビタミンの発見とビタミン欠乏症が報告され、大正6年には、かつて伝染病論者であった入沢達吉、田沢鐸二の両博士も脚気の伝染病説を否定し、糠成分未知物質が脚気の原因であり、未知物質の投与によって脚気の治療や予防が可能であることを発表しました。

いのちを救う主張、ついに実る

時を同じくして、脚気伝染病説を支持し、国内で最も権威を持っていた青山胤通教授が大正6年に死去したこともあり、国内でも脚気の原因はビタミン説に統一されていくこととなりました。「調査会」が研究をはじめて11年の年月が費やされたのち、やっと伝染病説が否定されました。

その間、一貫して伝染病説に否定的発言を繰り返していた遠山博士は、学会で痛烈な批判を常に受けていたことが記されています。「米糠が脚気に効くならば馬の小便でも効くだろう」との嘲笑にも立ち向かい、遠山博士は、実験医学に基づいた科学的データから正論を訴え続けたのです。

学術振興 (調査・研究)

身近な食や環境の問題について

当法人では、企業の食品衛生担当者や環境衛生担当者対象のセミナーを1976(昭和51)年より40年以上にわたって開催し、最先端の食や環境の情報提供に努めてきましたが、昨年度に続き本年度も、新型コロナウイルスの影響により中止となりました。食の安全に関する学会の支援や、WHOのアクションプランに呼応した薬剤耐性調査は継続して行っています。

■食品従事者から検出されたサルモネラ属菌の血清型と薬剤耐性

1980年代頃から抗菌薬の効かない薬剤耐性菌が増加し、感染症の治療に大きな問題が生じています。このため2015年にWHOは薬剤対策のアクションプランを提言し、世界に向けて調査や制御対策を要請しました。

当法人の臨床微生物検査部では、食品従事者から検出されたサルモネラ属菌を対象に2017年から薬剤耐性頻度の検討を行ってきました。2021年度は、2020年に分離されたサルモネラ属菌200菌株を対象とした薬剤耐性成績を2019年に実施した成績と比較検討を行いました。

1. サルモネラ属菌の血清型別

供試した200菌株は48の血清型に型別されました。主な血清型は表1に示すように37菌株(18.5%)が血清型Schwarzengrundに型別され、ついでThompson25菌株(12.5%)、Infantisが18菌株(9.0%)、Saintpaulが13菌株(6.5%)で、昨年度の調査に引き続きSchwarzengrundが最も多い血清型でした。

2. サルモネラ属菌の薬剤耐性

供試した200菌株のうち81菌株(40.5%)が1剤から11剤の薬剤の耐性株でした。このうち2剤の薬剤耐性株が12菌株(6.0%)、3剤以上の薬剤耐性株が51菌株(25.5%)でした。最も高頻度に型別されたSchwarzengrundは、供試菌株37菌株のうち36菌株(97.3%)が耐性株であり、3薬剤以上の多剤耐性株も31菌株(83.8%)ありました。耐性株の出現状況は昨年とほぼ同等の結果であり、血清型による薬剤耐性株の出現状況に著しい差異が認められました。

まとめ

2020年に分離されたサルモネラ属菌の血清型は、図1に示すように2019年に分離された血清型とほぼ同様でした。また、分離菌株の耐性率は2年続けて同率の40.5%となり、3薬剤以上の多剤耐性率においては19.5%から25.5%とやや増加しました。耐性率の高いSchwarzengrundが占める割合が12.5%から18.5%と増加したことが耐性率増加の原因の一つと考えられます。今後ともサルモネラの血清型と薬剤耐性の動向を継続的に調査し、薬剤耐性モニタリング事業として社会に貢献する資料を提供していきたいと思っております。

学会等支援

日本食品微生物学会への支援

当法人は、1989(平成元)年4月より33年にわたり学会事務局として学会活動を支援しています。同学会は食品の微生物に関する学術研究の推進、並びにその成果の普及を図り、食品の安全および機能の向上に寄与することを目的とした学会です。企業・行政・研究機関のいわゆる産官学で構成されています。



日本カンピロバクター研究会への支援

当法人は、2011(平成23)年度から研究会事務局として、細菌性下痢症の最も主要な病原菌である本菌の研究者や食中毒・感染症防止に取り組む方々の学際的な研究を支援しています。



※画像は2014年に撮影

図1 2019年と2020年に分離されたサルモネラ属菌の血清型別の比較 (2021年度に実施)

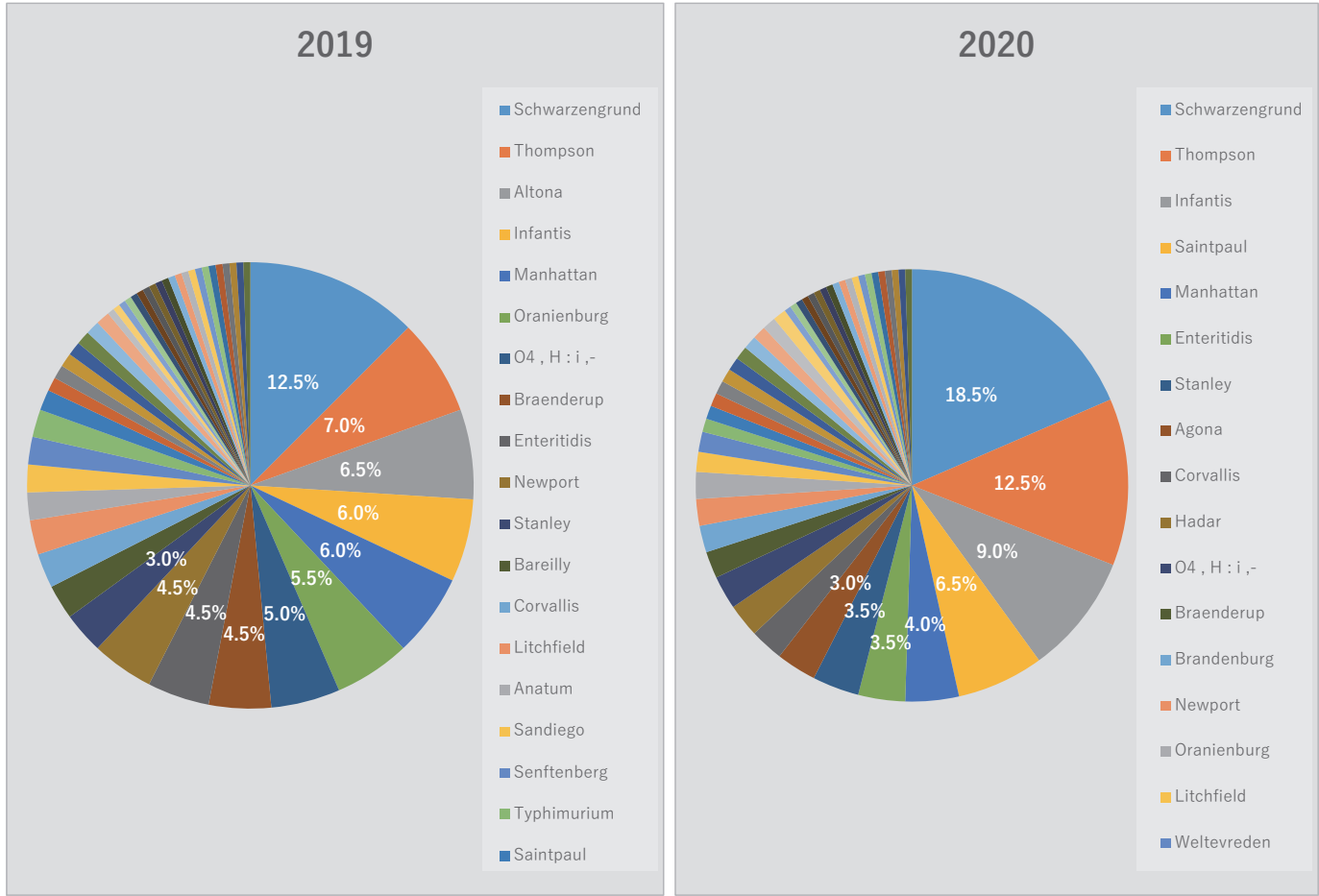


表1 2020年に分離されたサルモネラ属菌の血清型別および薬剤耐性 (2021年度に実施)

	血清型名	菌株数	感受性	1剤以上耐性合計		1剤のみ耐性		2剤のみ耐性		3剤以上耐性	
				菌株数	(%)	菌株数	(%)	菌株数	(%)	菌株数	(%)
1	Schwarzengrund	37	1	36	(97.3)	3	(8.1)	2	(5.4)	31	(83.8)
2	Thompson	25	21	4	(16.0)	3	(12.0)	1	(4.0)	-	
3	Infantis	18	13	5	(27.8)	-		2	(11.1)	3	(16.7)
4	Saintpaul	13	11	2	(15.4)	1	(7.7)	-		1	(7.7)
5	Manhattan	8	0	8	(100.0)	1	(12.5)	5	(62.5)	2	(25.0)
6	Enteritidis	7	0	7	(100.0)	7	(100.0)	-		-	
6	Stanley	7	6	1	(14.3)	-		-		1	(14.3)
8	Agona	6	5	1	(16.7)	1	(16.7)	-		-	
9	Corvallis	5	5	-		-		-		-	
9	Hadar	5	0	5	(100.0)	-		1	(20.0)	4	(80.0)
9	O4, H:i,-	5	0	5	(100.0)	-		-		5	(100.0)
12	Braenderup	4	4	-		-		-		-	
12	Brandenburg	4	4	-		-		-		-	
12	Newport	4	4	-		-		-		-	
12	Oranienburg	4	3	1	(25.0)	1	(25.0)	-		-	
16	Litchfield	3	3	-		-		-		-	
16	Weltevreden	3	3	-		-		-		-	
	その他の血清型(31型)	42	36	6	(14.3)	1	(2.4)	1	(2.4)	※4	(9.5)
	合計	200	119	81	(40.5)	18	(9.0)	12	(6.0)	51	(25.5)

対象薬剤：アンピシリン、セファゾリン、セフォタキシム、ストレプトマイシン、ゲンタマイシン、カナマイシン、テトラサイクリン、クロラムフェニコール、コリスチン、ナリジクス酸、シプロフロキサシン、スルファメトキサゾール+トリメトプリム合剤

※血清型：Houston、Kentucky、Minnesota、Montevideo

普及啓発

(創立130周年
記念シンポジウム)

働き盛りからの予防医療の普及啓発

1994(平成6)年より「働く人の健康増進セミナー」を7回開催、「働く人の健康教育講座」を15回開催するほかシンポジウムも多数開催してきました。

2008(平成20)年から『健康日本21』*に基づく健康セミナーシリーズを展開し、2018(平成30)年度より認知症のセミナーシリーズを3年計画で開催。創立130周年を迎える本年度は、新型コロナウイルスをテーマにシンポジウムを企画開催しました。

*21世紀における国民健康づくり運動

◆東京顕微鏡院 創立130周年記念シンポジウム

「新型コロナウイルス感染症とは～新しい日常で、いま私たちにできること」

オンデマンド配信開始日: 2022(令和4)年2月16日(水)

後援: 厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、日本医師会、東京都医師会

座長: 渡邊治雄(国立感染症研究所 名誉所員〈元所長〉、公益財団法人黒住医学研究振興財団 理事長)

◆プログラム◆

- ◆主催者挨拶: 中村 哲也
(「医社」こころとからだの元氣プラザ 統括所長)

- ◆プロローグ
「近年の新興感染症」
渡邊 治雄 先生
(国立感染症研究所 名誉所員〈元所長〉、
公益財団法人黒住医学研究振興財団 理事長)

- ◆講演
「COVID-19のこれまで、そしてこれから」
尾身 茂 先生
(「公財」結核予防会 代表理事、新型コロナ
ウイルス感染症対策分科会 会長)

- ◆講演
「新型コロナウイルス感染症への対応について」
大曲 貴夫 先生
(国立国際医療研究センター 国際感染症
センター長・理事長特任補佐、東京都新型
コロナウイルス感染症モニタリング会議
専門家)

- ◆講演
「来たるべきパンデミックへの対応について」
館田 一博 先生
(東邦大学医学部微生物感染症学講座 教授、日本臨床微生物学会 理事長、新型コ
ロナウイルス感染症対策分科会 構成員)

- ◆パネルディスカッション
座長: 渡邊 治雄 先生
パネリスト: 尾身 茂 先生、
大曲 貴夫先生、館田 一博先生
(ご登壇順)



私たちの生活を一変させ、わずか数ヶ月ほどで全世界を混乱に陥れた、新型コロナウイルス(COVID-19)のパンデミック。わが国でも対策が進められていますが、新たな株の出現報告もあり、依然予断を許さない状況が続いています。

東京顕微鏡院は本年度で創立130周年の節目の年となります。記念すべき年である本年、環境や衛生、人びとに大きな影響をもたらした新型コロナウイルスをテーマに取り上げ、各分野の第一人者を講師に迎えて講演いただきました。

講演では渡邊先生をはじめとする3名の先生方より、「近年の新興感染症」、「COVID-19のこれまで、そしてこれから」、「新型コロナウイルス感染症への対応について」、「来たるべきパンデミックへの対応について」と題し、最新事情をご紹介いただきました。

渡邊先生を座長としたパネルディスカッションでは、事前に募集した質問にお答えいただく形で議論が進み、リスクコミュニケーションの難しさについては、専門家がワンボイスとなり、わかりやすい言葉で繰り返し伝え続けることが重要であるなど、多くの意見が交わされました。

講演に際して、人流抑制のために講師ごとの拠点と収録会場を繋いで収録する、リモート収録の形式で行いました。収録会場では最小限のスタッフで協力して運営に当たり、徹底した感染対策に努めました。



■主催者挨拶:中村 哲也

((医社)こころとからだの元気プラザ
統括所長)



「東京顕微鏡院創立者である遠山椿吉先生も尽力された感染症研究にちなみ、創立130周年の記念シンポジウムは新型コロナウイルス感染症を取り上げさせていただきました。本日のシンポジウムが皆様の健康に寄与することを願っております。」

■講演「新型コロナウイルス感染症への対応について」

大曲 貴夫先生(国立国際医療研究センター 国際感染症センター長・理事長特任補佐、東京都新型コロナウイルス感染症モニタリング会議 専門家)



ワクチン接種が重症化を防ぐことをお話しされ、今後、迅速な医療提供体制の充実などの仕組みがかみ合ったとき、はじめてポストコロナ時代の入り口に立てるのだろうと述べられました。

■プロローグ「近年の新興感染症」

渡邊 治雄先生(国立感染症研究所 名誉所員(元所長)、公益財団法人黒住医学研究振興財団 理事長)



近年の新興感染症の要因を微生物側、宿主側、環境側から解説し、今後の対応としてワンヘルス・アプローチ、(様々な学問の協力体制による、新規病原体を検知する能力)が重要であると述べられました。

■講演「COVID-19のこれまで、そしてこれから」

尾身 茂先生((公財)結核予防会 代表理事、新型コロナウイルス感染症対策分科会 会長)



従来のインフルエンザとオミクロン株の違いを説明され、これからの日常ではあらゆる場面でのひとりひとりの基本的な感染対策が大切であるとお話しされました。

■講演「来たるべきパンデミックへの対応について」

館田 一博先生(東邦大学医学部微生物感染症学講座 教授、日本臨床微生物学会 理事長、新型コロナウイルス感染症対策分科会 構成員)



SARS・MERSや近年の新型コロナの大流行の経験から、今後のパンデミックは必然であると指摘し、平時から世界に対して責任を果たせる体制の整備をする必要があると述べられました。

■パネルディスカッション

座 長：渡邊 治雄先生
パネリスト：尾身 茂先生、大曲 貴夫先生
館田 一博先生(ご登壇順)



パネルディスカッションでは、後遺症に対する質問などにお答えいただきました。男性よりも女性に多く、痩せ型の人に出現率が高いことが判明しているなど、活発な意見交換が行われました。



YouTubeにて本シンポジウムをオンデマンド配信中。
<https://www.youtube.com/watch?v=WVoIVtFOU5w>

本シンポジウムの講演録を出版予定です。
※当財団ホームページにてお知らせいたします。

普及啓発 (次世代の育成)

次世代を担うこどもたちへ

2006(平成18)年よりスタートし、16年目となる夏休み「こども研究者体験」セミナーは、新型コロナウイルス感染症流行のため、中止となりました。その代替として動画を企画・制作し、インターネットで配信しました。サイエンスを学ぶ楽しさ、食品の安全性や健康に関心を持つきっかけとして、次世代を対象とした衛生思想の普及啓発に努めています。

■動画『気をつけよう食中毒!』

新型コロナウイルス感染症流行のため、2020年に続き2021年も夏のセミナーは中止となりました。昨年は代替として『こども研究者体験ワークブック』を作成しましたが、今年は、身近な病原菌が引き起こす食中毒の発生のしくみや予防法について、こども達に学んでもらうための動画を制作しました。動画はYouTube東京顕微鏡院公式チャンネルにて配信しました。

■食中毒ってなに？

食中毒とはどういう状態をいうのか。

■食中毒のしくみ

食中毒はどのようにして起こるのか。

■食中毒を引き起こす病原体って？

食中毒を引き起こす微生物にはどんな種類があるのか。

■予防するにはどうしたらいいの？

食中毒を予防するポイントについて。



配信日：2021(令和3)年11月
再生時間：8分48秒
対象：小学5・6年生
監修：伊藤 武(当財団学術顧問)
動画URL：https://youtu.be/eL0axXlvk_M

出版関連

活動の情報開示

両法人の「事業年報」を発刊し、公益事業として遠山椿吉賞受賞記念講演の講演録を掲載しました。

公益事業の年次ディスクロージャー誌として「公益事業レポート」を発刊しました。皆様に幅広くお配りし、公益事業の情報公開を行っております。

■遠山椿吉賞受賞記念講演 講演録



遠山椿吉記念 第7回 食と環境の科学賞

「大気汚染物質、環境化学物質によるアレルギー悪化メカニズムの解明と悪化影響スクリーニング法の開発」

◎受賞者 高野 裕久氏

(京都大学大学院 地球環境学 地球益学専攻 環境健康科学論 分野 教授)

遠山椿吉記念 第7回 食と環境の科学賞 山田和江賞

「水中病原ウイルスの浄水処理性の詳細把握とウイルス処理に有効な浄水技術の新規開発」

◎受賞者 白崎 伸隆氏

(北海道大学大学院 工学研究院 環境工学部門 准教授)

■公益事業レポート 2020



新刊

発行日：2021(令和3)年8月31日
サイズなど：A4判(講演録：23ページ)
CD-ROM付属
発行部数：1,000部
配布先：契約先、関係行政機関、
関係研究機関、関係団体など
※当財団ホームページでも公開しています。

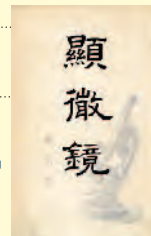
新刊

発行日：2021(令和3)年5月
サイズなど：A4判、16ページ
発行部数：2,000部
※当財団ホームページでも公開しています。

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの歴史と公益事業

～三つの世紀にわたる歩み

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き	【戦前】	普及啓発活動、出版、その他公益活動など
遠山椿吉、佐藤保、川上元治郎が協同して、京橋区にあった成医会の一室を借り、「東京顕微鏡検査所」を創立 検査業務開始	1800年～	『結核黴菌簡便検査法』出版
病原的黴菌標本の頒布を開始し、本所考案の喀痰沈殿器を製造販売	1891(明治24)年	『顕微鏡』第1号 (1894～1944年) ※後に「東京顕微鏡学会雑誌」に改称し、1944(昭和19)年戦時統制令で休刊するまで50年間発行
細菌検査の実務指導を行う講習科を開講 名称を東京顕微鏡院と改称	1892(明治25)年	機関誌「顕微鏡」第1号発行
種痘術講習科を新設。培養基の発売開始	1894(明治27)年	啓蒙用幻灯映画製作 「顕微鏡の祖」マルピギー200年記念式典、本院にて挙行
飲料水の検査を開始	1895(明治28)年	コレラ講習会を開催
母乳検査を開始	1896(明治29)年	回帰熱講習会を開催
事業拡大にともない、神田区小川町に移転	1899(明治32)年	ペスト講習会を開催
	1900年～	第2回日本医学会(1893(明治26)年) 東京顕微鏡院が、東京慈恵医院、海軍軍医学校、伝染病研究所、大日本製薬会社と並び、参観となる
遠山椿吉院長、初代東京市衛生試験所長に任ぜられる ペスト試験室を新設	1903(明治36)年	来日したコッホ博士を囲む生花の会(於帝国ホテル) 前列左からロベルト・コッホ博士、北里柴三郎博士、後列左から2人目が遠山椿吉
遠山椿吉院長、医学博士の学位を授与される	1907(明治40)年	「結核征伐の歌」
保健部を新設。広く世間の人びとに対し、健康診査(健康診断)と衛生上の協議(衛生相談)を開始	1908(明治41)年	遠山椿吉院長、来日したロベルト・コッホ博士、北里柴三郎博士を招待し、生花の会を開催
遠山椿吉院長、東京市参事会より独ベルリン市開催万国衛生および民勢学会参列、欧州各都市衛生設備実況調査を命ぜられる	1914(大正3)年	「結核予防善悪鑑」発行、「結核征伐の歌」を発表
同時に、内務省より欧米都市における汚物掃除の実況調査を囑託(翌年帰国)	1915(大正4)年	
遠山椿吉院長、内閣より医術開業試験委員を命ぜられる	1922(大正11)年	「遠山博士脚氣病原因之研究」発行
(院長、長年来の研究による)脚氣治療薬 うりひんを製品化	1923(大正12)年	「遠山博士脚氣病原因之研究」
創立30周年記念祝賀会	1927(昭和2)年	「人生の意義と道徳の淵源」出版。天皇に献上
9月1日関東大震災により、院舎およびその設備をすべて焼失	1928(昭和3)年	
9月6日麻布区富士見町に仮院舎を建設し、10月1日一般業務を再開	1929(昭和4)年	脚氣の無料診療を開始
内務大臣より財団法人の設立許可を受ける	1930(昭和5)年	第1回脚氣無料巡回診療実施(財団法人東京顕微鏡院社会部)
遠山椿吉、肺がんのため遠逝、享年71	1935(昭和10)年	結核予防週間および健康週間に参加し、無料喀痰検査などを実施
レントゲン深部治療開始	1945(昭和20)年	
創立50周年記念式典(1940年)	【戦後】	
戦災により、以後10年にわたり事業中断	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
遠山正路院長より事業を継承		
診療所を開設、細菌検査所を再開		



東京顕微鏡院講習科第1回卒業式
(1892年)



うりひん広告



震災後に復興した東京顕微鏡院本院(1925年竣工)同年、病理組織検査開始、レントゲン科新設

歴代代表者	(在任期間)	歴代代表者	(在任期間)	歴代代表者	(在任期間)
創立者(院長) 遠山 椿吉	1891~1928年	第4代(院長) 高橋 悌三	1957~1967年	第7代(理事長) 下村 満子	1995~2007年
第2代(院長) 遠山 正路	1929~1954年	第5代(理事長) 山田 匡蔵	1967~1989年	現理事長	山田 匡通 2007年~
第3代(院長) 細谷 省吾	1955~1957年	第6代(理事長) 山田 和江	1989~1995年		

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き		普及啓発活動、出版、その他公益活動など	
職域を対象とした健康診断業務を開始。外来診療開始			
臨床検査は病院からの受託のほか、学校保健法による 集団検査を拡大	1967(昭和42)年		
東京都の委託を受け、小中学生の 大気汚染の影響調査を実施(5年継続)	1972(昭和47)年		
建替えによる新院舎完成。	1974(昭和49)年		
人間ドック事業を開始。付属臨床検査所を登録			
食品衛生法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受け、 食品衛生検査所を開設	1975(昭和50)年		
がん検診(胃、子宮、乳房)開始。多摩分室を立川に開設	1976(昭和51)年		
	1978(昭和53)年	離島村民の健康管理を目的とした 「小笠原健康な村づくり事業」を開始 「小児ぜん息母親教室」、食品衛生セミナーなどを開催	
水道法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受ける (簡易専用水道検査)	1979(昭和54)年		
立川衛生検査センターを開設	1986(昭和61)年	再興30周年記念シンポジウム「21世紀のいのちと生活」を開催	
付属第2臨床検査所を登録	1987(昭和62)年	学術普及誌「健康と環境」創刊(~2000年)	
	1991(平成3)年	創立100周年記念シンポジウム「21世紀への生命潮流」を開催	
	1992(平成4)年	シンポジウム「ベイブリッジフォーラム '92-21世紀への対がん戦略」を開催 平成4年度より事業年報の発行開始	
食品検査施設を移転し、日本橋研究所を開設 (2001、2002、2005年に順次拡大)	1996(平成8)年		
立川事務所を開設、食品等分析調査研究所を合併 (1998年、食と環境の科学センター検査第3部に改組)	1997(平成9)年	シンポジウム「新時代の高血圧管理」 「職場と住宅環境を考える」などを開催	
会員制人間ドックを開始	1998(平成10)年	シンポジウム「新しい時代の糖尿病対策」 「はたらく女性とメンタルヘルス」などを開催	
	2000年~		
食と環境の科学センター日本橋研究所に検査第3部を 移転し、拡大		創立110周年記念日米メディカルシンポジウム 「21世紀の女性と性(ジェンダー)と健康」を開催	
トータルヘルスセンターBe-Well、 女性のための生涯医療センターViViを開設	2001(平成13)年		
	2002(平成14)年	創立110周年記念シンポジウム「食の安全と健康を考える」 を開催	
医療部門を統合・拡充し、 医療法人社団こころとからだの元氣プラザを 設立	2003(平成15)年	女性のための生涯医療センターViVi 開設1周年記念 シンポジウム「アダムとイブの医療革命」を開催	
水道法改正により、厚生労働大臣指定検査機関から、登録検 査機関への変更の認可を受ける	2004(平成16)年		
食品衛生法改正により、厚生労働大臣指定検査機関から、登 録検査機関への変更の認可を受ける	2005(平成17)年	東京顕微鏡院創立115年、こころとからだの元氣プラザ創立3年 記念シンポジウム「いのちとは何か、生きるとは何か」を開催	
	2007(平成19)年	メディカル・シンポジウム「医療の未来、日本の未来 -なぜ日本では高度先端医療が遅れているのか?」を開催	
立川研究所を一ヶ所に統合拡大		遠山椿吉生誕150年、没後80年を記念して遠山椿吉賞創設	
こころとからだの元氣プラザ Pマーク(プライバシーマ ーク)認証を取得	2008(平成20)年		
こころとからだの元氣プラザ(飯田橋) 外来診療と女性のための生涯医療センターViViを統合		「遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞」を西尾治氏、 同奨励賞を川崎晋氏に授与	
	2009(平成21)年	遠山椿吉生誕150年記念シンポジウム 「東京の水の源流を探る~豊かな東京の水利用を支える 日本の水、世界の水~」を開催	



旧院の様子(1970年)



「小笠原健康な村づくり事業」(1978年~)



簡易専用水道検査
(1979年~)



ベイブリッジフォーラム'92
-21世紀への対がん戦略

こころとからだの元氣プラザ
(2003年~)



東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き		普及啓発活動、出版、その他公益活動など
こころとからだの元氣プラザ、アジュール竹芝総合健診センターの運営を受託 臨床検査部がこころとからだの元氣プラザの組織に移行 三菱化学メディエンスと共同運営で「元氣プラザ臨床検査センター」をスタート	2010(平成22)年	「遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞」を鈴木隆雄氏、同「特別賞」を中村雅一氏に授与
3月11日 東日本大震災により、創立120周年記念式典・祝賀会、創立120周年記念顧客イベント中止 4月1日 創立120周年 立川研究所に「動物を用いる検査施設」開設	2011(平成23)年	「遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞」を塩見一雄氏、同「特別賞」を小泉昭夫氏に授与 創立120周年記念シンポジウム「アルツハイマー型認知症の治療・予防戦略—研究・治療・ケアの最前線から」を開催
創立120周年記念年頭式 豊海センタービル竣工 日本橋研究所が施設拡充に伴い、豊海研究所に移転 4月1日に財団法人東京顕微鏡院は一般財団法人に移行、「一般財団法人 東京顕微鏡院」と名称変更	2012(平成24)年	「遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞」を白木正孝氏、同「特別記念賞」を久山町研究グループ代表 清原裕氏に授与
[ISO/IEC 17025:2005]を認定取得(放射能試験)※1 登録衛生検査所「元氣プラザ細胞病理コアテクノロジー」がスタート	2013(平成25)年	「遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞」を小西良子氏、同「功労賞」を石川哲氏に授与 「創立120周年記念誌」を刊行
元氣プラザビル3～5階の人間ドック・健診フロアを男女別フロアに改装 [ISO/IEC 17025:2005]を認定取得(食品試験：理化学、微生物)※1 「元氣プラザ臨床検査センター」機能を元氣プラザビル内に移設拡充し、院内施設化。これに伴い、衛生検査所登録を抹消	2014(平成26)年	「遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞」を岡山明氏、同「特別賞」を伊藤千賀子氏、同「奨励賞」を西浦博氏に授与
	2015(平成27)年	「遠山椿吉記念 第4回 食と環境の科学賞」を新田裕史氏、同「奨励賞」を山口進康氏に授与
	2016(平成28)年	故山田和江名誉理事長・医師の50余年の功績を記念して、遠山椿吉賞50歳未満の応募者を顕彰する「山田和江賞」を創設 「遠山椿吉記念 第4回 健康予防医療賞」を野田光彦氏、同「山田和江賞」を石和田稔彦氏に授与
	2017(平成29)年	「遠山椿吉記念 第5回 食と環境の科学賞」を加藤昌志氏、同「山田和江賞」を原田浩二氏に授与 DVD教材「これで納得! HACCPシステム導入のための7原則」を刊行
	2018(平成30)年	「遠山椿吉記念 第5回 健康予防医療賞」を辻一郎氏、同「山田和江賞」を富岡公子氏に授与 eラーニング「はじめての食品表示」を実施
	2019(平成31/令和元年)	「遠山椿吉記念 第6回 食と環境の科学賞」を鈴木聡氏、同「山田和江賞」を杉山圭一氏に授与
[ISO/IEC 27001:2013]を認定取得 (ISMS) Pマーク (プライバシーマーク) 7回目の更新※2 [ISO/IEC 17025:2017]を認定取得 (化学実験、食品・医薬品試験) ※1 「動物を用いる検査施設」を豊海研究所に移設 「診療所こころとからだの元氣プラザ」神保町に移転	2020(令和2)年	「山田和江賞」の募集対象を40歳以下とした 「遠山椿吉記念 第6回 健康予防医療賞」を上田豊氏、同「山田和江賞」を可知悠子氏に授与
こころとからだの元氣プラザ「健康経営優良法人2021」認定を取得 4月1日 東京顕微鏡院創立130周年 検査キットのインターネット販売を開始	2021(令和3)年	「遠山椿吉記念 第7回 食と環境の科学賞」を高野裕久氏、同「山田和江賞」を白崎伸隆氏に授与
こころとからだの元氣プラザ「健康経営優良法人2022」認定を取得 立川立飛南地区38号棟PCR検査センターを開設	2022(令和4)年	「遠山椿吉記念 第7回 健康予防医療賞」を飯島勝矢氏に授与 創立130周年記念シンポジウム「新型コロナウイルス感染症とは～新しい日常で、いま私たちにできること」をオンデマンド配信

※1 一般財団法人 東京顕微鏡院

※2 医療法人社団こころとからだの元氣プラザ

Our Credo 私たちの公益事業

1. 創業精神に則り、人びとの健康と、食品の安全、生活環境衛生向上のため、両法人の事業を基盤に、世の中に貢献します。
2. 時代の先を見つめ、先駆的な視点から発信することに努めます。
3. 職員が参画意識をもてる仕組みを作り、組織の活性化に生かします。

<顕彰制度>

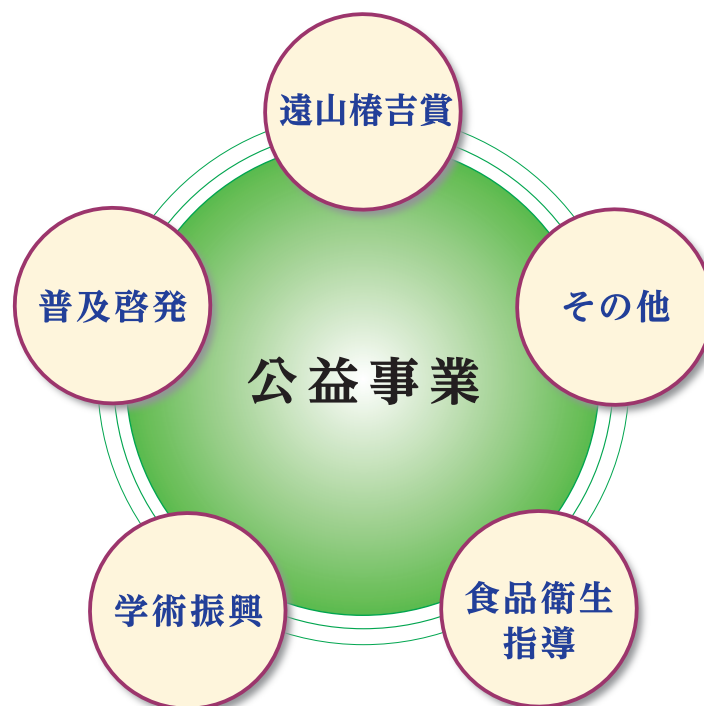
- *遠山椿吉記念 第8回 食と環境の科学賞 顕彰
(告知、応募論文募集、選考委員会開催、授賞式・記念講演・レセプション開催、講演録作成)
- *遠山椿吉記念 第8回 健康予防医療賞(令和5年度)準備

<セミナー>

- *健康セミナー
- *食と環境のセミナー

<出版等>

- *企画制作



<次世代育成>

- *夏休み「こども研究者体験」セミナー

<その他>

- *公益事業レポート

2022(令和4)年度 公益事業計画

発行:

一般財団法人 東京顕微鏡院 公益事業室

〒102-8288 東京都千代田区九段南4-8-32 TEL.03-5210-6651 <https://www.kenko-kenbi.or.jp>

医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 広報室

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング TEL.03-5210-6897 <https://www.genkiplaza.or.jp>